

思いだしました。青くすみきった空に、羽ばたきの音を残しながら、鳩はとの群むれが皇居こうきよの方にとんでいきました。

会場は、広い道場の中央に、すがすがしい青だたみが、三十じょうほどしかれていました。熱気がむんむんこもっていて、広さを感じさせないほごでした。

試合前の、いろいろな行事が進められるうちに、その熱気は、ますます高まつて最高潮さいこうちようになったとき、西郷四郎と照島太郎てるしまの名がよびあげられました。

身長一八八センチ、体重八〇キロの照島とむきあつて立つ四郎は、身長一五五センチ、体重五〇キロ——大きな熊くまに立ち向かう小人こびとのように見えます。

立ちあがった二人は、すぐには組みつこうとしません。おたがいに、相手をにらみつけながら、じりっじりっど、右にまわりこもうとします。目と目、心と心のたたかいです。

「ええいつ。」